

book review



きわめてユニークな一冊の本が米国の Lippincott から刊行されている。本書の巻頭にも述べられているように一般の人々はその時代の科学の進歩を受け入れるのに非常に保守的である。とくにある程度の危険を伴う科学の進歩や一般の人々の興味を刺激しない科学の場合がその典型と思われる。本書で取り上げられている生殖科学もその一つの好例で、ともすれば潜在的な危険がもう一つの潜在的な科学の恩恵を押し潰してしまうことがある。この本は近年の生殖科学におけるいくつかの技術的発展を単に解説するのではなく、同じ章で道徳、倫理、法律、社会的側面からの意見を存分に追加している。取り上げられているテーマも生殖医学一般の問題のほか、とくに出生前の生殖体検査の診断、先天性奇形の診断、低体重児の問題、植物人間化した妊婦の取扱い、IVF、胎児治療など、今後の生殖医学が避けて通れない重要な項目を網羅している。科学の進歩が独歩しがちな今日、いかに社会的コンセンサスを得ながら生殖医学に携わるか、恰好の指南書といえようか。

慶應義塾大学医学部産婦人科講師 牧野 恒久



近年の膨大な医学情報の洪水の中ですべての点を満足させる一冊の textbook を選びだすことは必ずしも容易ではない。産科学・婦人科学についても事情は全く同じである。結局のところ、細分化された各領域の専門書を何冊か揃えるか、あるいは容易ではないがほぼ全領域をカバーしていると思える一冊の textbook を探しだす努力を強いられることになる。本書は正しく後者に属する教科書で65人の執筆者によって354の図表、総ページ1,254という分厚い一冊の本に纏められている。全56章から成る本書は従来の産婦人科学の textbook のように、まず女性性器の解剖から始まるが、版を重ねるごとに時代の新しい情報を取り入れ genetic factor, ultrasonography, immunology, endometriosis などの項を一つの章として独立させている。また本邦の教科書と異なり、乳房の項目も一つの章としており、最後に医事法律の項も独立させている。一つの textbook も6版目になると、各章のタイトルは従来どうりであっても、内容は随所に新しい知見が追加されており、取りあえず一冊だけ産婦人科学の教科書を揃える場合の、最良の対象となるように工夫されている。

慶應義塾大学医学部産婦人科講師 牧野 恒久